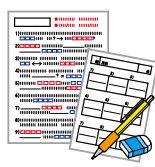


あららぎ



令和4年度 学校だより
甲府市立 上条中学校
全国学力・学習状況調査特別号

全国学力・学習状況調査の結果について

令和4年度の全国学力・学習状況調査は、4月19日（火）に小学校6年生と中学校3年生を対象に全国の小中学校で実施されました。「国語」「数学」に今年度は「理科」の検査が加わるとともに、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査もあります。調査の目的は、生徒の学力や学習状況調査を把握・分析し、各教科における課題や生活状況の実態などを明らかにすることにより、今後の指導内容や指導方法の改善や生活指導等に役立てることです。本校の分析結果がまとまりましたので、その概要を保護者・地域の皆様にもお知らせするとともに、本校ホームページにも掲載していきたいと思っております。

1. 本校の状況

本校の平均正答率は、国語・数学・理科の教科において、全国（公立）、山梨県（公立）をやや下回っている。各教科の結果については、2の「各教科の結果」のとおりである。

	国語	数学	理科
山梨県（公立）平均正答率	70	51	50
全国（公立）平均正答率	69.0	51.4	49.3



2. 各教科の結果から

中学校学習指導要領では、それぞれ教科等の目標や内容について、生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱に基づいて整理されており、これら3つの柱は相互に関係しながら育成されるものという考えに立っている。このうち、国語・数学・理科のそれぞれの教科について「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の2つの評価の観点に基づき出題されている。

(1) 国語

全体の平均正答率は、山梨県や全国と比べて全体的にやや下回る結果となった。特に、「知識及び技能」の中身を見たときに「言葉の特徴や使い方に関する事項」が全国平均と比較して下回る率が高い。その反面、「思考力、判断力、表現力等」における「書くこと」の正答率は山梨県や全国を上回る結果となった。これは「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く」ことを意識的に行うことができる生徒が多いといえる。

本校の課題である「言葉の特徴や使い方に関する事項」については、様々な種類の書籍や新聞などを読み、言葉の使われ方の意識を高めることで改善されていく。朝読書の徹底や家庭での読書の習慣化などの取組を行うことを具体的な改善策としていきたい。

(2) 数学

全体の平均正答率は、山梨県や全国と比べて全体的にやや下回る結果となった。正答率で山梨県や全国を上回る問題もあったが、差が開いた問題もあった。領域では「数と式」「図形」「データの活用」に比べ「関数」に、評価の観点では「知識・技能」に比べ「思考・判断・表現」に、問題形式では「選択式」「短答式」に比べ「記述式」に課題があった。

具体的な数値を求めたり、正しいものを選んだりする設問には比較的答えられているが、ことがら成り立つ理由や解決の方法を説明する設問に対しては苦手意識が強く、無解答率も高くなっている。問題を理解する力や考えを表現する力とともに、「ひとまずやってみよう」「自分なりに考えてみよう」といった積極性の向上も必要であると考えます。

(3) 理科

全体の平均正答率は、山梨県や全国と比べて全体的にやや下回る結果となった。「知識・技能」に

関しては、問題形式が選択式であるため無解答率は0%であるが、正しい選択ができないことから、基礎的・基本的な事項の定着が不足していると考えられる。また、「思考・判断・表現」に関しては、「観点や基準をもとに分析・解釈できるかどうかを見る」問いや「操作や条件の制御など、研究過程の見通しをもつことができるかどうかみる」問いに対しての正答率が全県よりも低い結果となった。両問共に問題形式が記述であり、無回答率も低い結果となった。

3. 教科における主な改善点

(1) 国語

○ 特に正答率が低かった「表現の技法について理解する」ことが求められている問題では、韻文・散文を問わず様々な種類の作品や文章に触れる必要がある。普段の授業や読書の機会においても、作者の意図や表現の特徴を意識した読み方に対する意識を高めていく。

○ スピーチにおける「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す」の正答率も低かった。国語科の授業内だけでなく他教科や特別活動の中でも、相手に伝える「目的意識」「相手意識」を持ちながら話していく意識を高めることを徹底していく中で、改善へと繋げていく。

(2) 数学

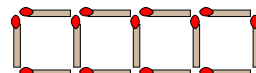
○ 基礎基本となる知識・技能については、定着と習熟を図りたい。計算を中心とした小プリントを用いて問題演習を行う時間を設け、学習の積み重ねをしていく。また、断片的な知識・技能にならないよう、既習事項とのつながりを確認しながら学習を進めていく。

○ 表やグラフから数量の間の関係をよみとって式に表したり、式の表す意味を言葉で表したり、理由や方法を言葉で説明したりする力の向上を図りたい。そのために、表やグラフからどんな規則性があるかをよみとらせたり、先を予測させたりする活動を取り入れる。また、数学を活用した問題場面では、立式・計算処理だけにとどまらず、式や数値がもつ意味を確認しながら言葉で表す活動も取り入れる。

(3) 理科

○ 「知識・技能」を問う設問においては、「見通し（何をするか、何が起きるのか）と振り返り（何が分かったのか、何が分からなかったのか）」を明確にした授業を行い、基礎基本を定着させる。

○ 「思考・判断・表現」を問う設問では、すべての記述式問題で課題が見られたことから「自然の事物・現象の中に問題を見だし、観察・実験から得られた結果を分析し、解釈する」科学的に探求する力の育成を念頭に置いた授業改善を行っていく。



4. 質問紙の結果から

山梨県や全国と比較し、特に差が顕著（10ポイント以上）であった質問は、“自分には良いところがあると思いますか” “将来の夢や目標を持っていますか” など「自己肯定感」の低さが要因となると考えられる項目であった。自分に対しての自信のなさがバーチャル空間であるゲームへの依存につながっているのではないかと予想される。“自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしている”という項目では87.0%の生徒がほぼ当てはまるという結果が出ている。やる気がないとは違い、何をすれば良いか理解し、先が見通せる状況であれば努力を重ねることができることが予想される。現3年生はコロナ禍の影響を最も大きく受けた学年で、様々な成功や喜びを得た経験が不足しているように感じる。これが、未来について考え、実行することへの不安要素につながっていると考えられる。

5. 質問紙調査からの改善点

本校の質問紙調査の結果から、「自己肯定感」を高めるための改善策として、部活動、委員会活動、学習など様々な活動を通して、小さな成功体験を重ねていくことが大切であると考え。学校と家庭が連携しながら、よい行いを褒めたり、お互いを認め合ったりする機会を設定していくことで自信を深め、自分を高めていくことができると考える。また、“学校で授業中に自分で調べる場面で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使っていますか”では16ポイント高い状況が見られた。端末を活用していくことで授業への意欲が変わっていく様子も見られる。今後も、PC端末を自分自身の目標達成するための手段として活用させながら、活動や学習を進めていきたい。また、各教科の授業でも、「めあて」を設定し「振り返り」を行うことで、自分自身何ができるようになったのかを認識させ、「自己肯定感」の向上につなげていきたいと考える。